

Browning の「炉辺にありて」について

鷺山 第三郎

「詩は歴史よりも、より哲学的で精緻である、なんととなれば詩は総合性を語るが歴史は個々の事柄を伝えるにすぎぬからである。」アリストテレス詩論 Chap. 9

この詩は1855年に出版された *Men and Women* の第1巻に載せられたブラウニング自身の恋愛と結婚に対する感想の表現であるといわれる。執筆当時(1854年とすれば)の詩人の年齢は、ロバートは42才、彼の妻エリザベスは48才で、結婚後8年の歳月を経たばかりで、まだ勢力旺盛な中年期のはずである。ところがこの詩の冒頭には、たとえ予定の詩的な構想とはいえ、作者は自分を白髪の老学究として、現世を他所にギリシヤ古典の鑑賞に余念のない超脱枯淡の存在としている。また白熱的であった恋愛の成果としての愛の彷徨の場面としても、晩年を想像してのためであろうが、人里を遠く離れたアルプスの中腹の断崖絶壁であり、そこに人間的接触の寄り所として描かれるのは中世を想わせる鄙びた石造の小さな教会堂である。しかもそれは会堂守もなく、祭壇の上には聖器も、掛布さえもない空莫な空家同然である。

William Clyde DeVane は「この詩は文字通りに自伝的だ、詩人の述べる恋愛事件は1845年にロンドンの Wimpole Street 50(エリザベスの家)で生じたことであり、また詩の背景は1853年にアメリカの画家 W. W. Stony と同道でブラウニング夫妻が旅行した Prato Fiorito への山道の傍にあった荒廃した聖堂と同じだ。翌10月5日に夫人は Bagni di Lucca の付近の自宅から従兄 Kenyon への手紙には『わたしは近頃驢馬にのっています。Wiedeman (息子)も同様です。わたしは大遠足にさえ出かけました(どんなに丈夫になったかがお分りでしょう)。Prato Fiorito までの大遠足、6マイルの往復はまったくの登り降りだったのです』とも誌している。従ってこの詩は多分この遠足の後、おそらくはその年の11月頃 Florence の自宅の炉辺で書かれたものであろう」と推測している。(DeVane: *Browning Handbook* p. 222)

生命の本領、生活の本質を語ろうとするのに、詩人はなにを好んで、かほどまでに自分を社会から超脱させ、人気のない環境に自分たち二人のみを遊

離させねばならないか。たとえ1篇の抒情詩としてもなんとなく奇異の想いを抱かしめられる。「この詩の難解な所以は作者の見解と構想とに因るが、主題が、この叙景や筋から離れて、後から叙述されるという、その方式によるためである」(Studies of the Mind and Art of Robert Browning : p. 496. James Fortheringham) と評者はいっているが、要するにこの詩人のこの場合の恋愛と結婚とは、世の常の耽美的なものではなかったと思われられる。彼の場合は端的にいて結婚を離れて恋愛は考えられず、恋愛は結婚と一体をなす個人的のものであった。本質的にいえば、これも総合性をもった恋愛観といえるかも知れぬが、厳密にいえば、この詩そのものは恋愛至上主義とか、ダンテの「新生」に見るような恋愛神聖論などと称すべきものではなく、むしろこの詩人独特の人生観の根底をなす理想主義的世界観から必然的に派出した結婚観であると思われる。従ってこの詩に表現されているブラウニングの恋愛なるものは、和泉式部が、

かく恋ひば堪えず死なまし垣間見し

人こそおのが生命なりけり

と歌った束の間の激情ではない。Robert Burns の “A Red, Red Rose” や Rossetti (D. G.) の “The Blessed Damozel” などに謳われているような浪漫的な美への陶醉でもない。その方面から見ればむしろ次元の異った生命の躍動であって、中世の騎士たちが脳裏に描いた理想女、女神への忠誠献身という類のものにいくらか似ているが、実をいえば、もっと現実性と実証性のある自己実現への意欲が、自分の理想の片影を一人の女性に見出したときに、これに合体共存しようとの情熱であった。この場合、この詩人は自己を忘却してはいない、むしろ極限まで自己を意識して、その内包としての恋人を捉え、これに合体するによって自我の拡張した姿を見ようとするのである。これは “The desert were a Paradise, If thou were there” の心持ちとは異なる、nymph と共に楽園に遊ぼうとするのでもない、むしろか弱くとも理想の女性たる妻 Leonor と共に高嶺に攀じのぼろうとするのである。老境の二人が彷徨するアルプスの情景は、ブラウニングの心に描かれている恋愛の完成、二つの者が一つになりえた理想境を物語るものと思われる。彼にとってかような生命の投合はただ人意の努力がさせるのではなく、その根源は自然がしからしめるのであった。二人は自然の部分として投合したればこそ普遍的生命へ到達したと信じていたようである。

ここにプラトンの恋愛論 (Symp. 211 B) の1節を紹介して見よう。「ま

ことの恋愛者は恋人の美しさを思うときに絶対美を念頭に想い浮べるものだ。肉体のほだしから離れた愛人に対する憧れは、愛人の性格と心情の美に鋭い考察をするようになり、肉身上の条件は単なる幻影にすぎなくなる。やがて彼はその精神美の普遍性を発見して、彼女の行動や考え方が自然界のいたるところにあるように思うようになる。やがて彼女は一個人から宇宙へと移行して、彼自身の魂もはなはだしく純化されるがために、現象世界の美しい人間や物象の究極の根元たる美のアイデアに融合するようになる」(Symp. 211 B)。これはいわゆるプラトー的恋愛観であるが、この By the Fireside は、詩人が意識していたか否やとは別として、その構想には確かにこの理想主義哲学者の説に一致するものがあると思われる。

詩人の妻、Elizabeth Barret は彼よりも6才年長であった。結婚したのは彼女が41才、彼が35才のときである。もともと彼女は富裕な貴族的な家庭の息女であったが、13才のとき、落馬が原因で肺動脈に故障を生じて寝台に横たわったまま結婚のときまで孤独でいた。もっとも、抜群な頭脳を持つ彼女は病床にいながらも、ギリシヤ古典に通じ、その翻訳もし、抒情詩も書いて、英国の詩壇ではすでに光彩ある閨秀詩人となっていた。詩人としてのブラウニングを知って、彼をワーズワスやテニスンと並び称すべき秀れた詩人として世に紹介したのは彼女であった。1845年に彼はエリザベスの従兄 John Kenyon の紹介で始めて彼女を訪問した。両者はすでに内面的に相識していたが、彼女は眼のあたり見る彼の気宇の偉大さと理想主義に燃ゆる魄の迫力と、全身に満ちる生命のエネルギーとを感受した。しかもそれらは直截的に彼女に対する尊敬と愛とに充満するものであった。それは彼女のか弱い生命とたよりない心にはこの上もない後盾の念いがあり、むしろ救い主の到来のように感じられたことは、秀れた彼女の恋愛抒情詩集 *Songs from the Portuguese* の殆んど各頁に正直に告白されている。それまでの彼女の生涯は “The sweet, sad years, the melancholy years” で、絶えず死の暗い影が訪れていた。それなりに Browning の唐突な求婚は彼女には一つの驚異であった。

“Guess now who holds thee?”—

“Death,” I said. But there,

The silver answer rang: “Not Death, but Love.”

「誰がおまえを捉えたと思うか？」

「死です」と私はいった。ところが朗らかな答えがあった。「死では

ない、愛だ」と。

現われた愛が予想外に大きく力強いだけに、自分の年齢や健康状態を顧みて、それが外見的なものへの愛ではないかとの不安が襲ったようだ。Do not say, "I love her for her smile—her look—her way of speaking gently,—for a trick of thought That falls in well with mine, and certes brought A sense of pleasant ease on such a day"—

愛は本性として杞憂を伴い、一切の具象的な条件を超脱した愛そのものを求める。

But love me for love's sake, that evermore
Thou may'st love on, through love's eternity.

こうして彼女は最終的な要求をしながらも、自分自身を考えると、何一つ与えるものがない現実に苦しみ悩まねばならなかった。それは愛ゆえの悲哀であった。

For grief indeed is love and grief beside.
Yet love me—wilt thou? Open thine heart wide,
And hold within the wet wings of the dove.
げに悲しみとは恋と悲しみとにぞある。
しかも吾を愛したまえ—直ないたまうや?
御胸をひろやかに開きて、
君の小鳩の濡れし翼をかくまいたまえ。

これに応答する彼の態度は、きわめて高踏的であった。彼は彼女の要求に先立って、すべての肉体的な条件はおろか社会的制約さえも超えて、堂々と自由に彼女の生命を要求し、愛した。それは単なる一女性ではない、透徹した知能性と至高の直感を身に宿した超自然的存在であった。

彼は約1カ年間の交通や面会ののち、必然事のように結婚を申込んだ。彼女の健康がそれに不適當であったが、最後の障害は息女の一人をも他に嫁がせようとせぬ彼女の父の頑強な反対であった。これを超克するためには、打解の敢行が必要である。二人はわずかな理解者と妹たちの援助をえて、万事を押切って家庭から逃亡し1846年9月、人知れず結婚式を挙げてフランスを経て遠くイタリアに行った。そして西海岸のピサに暫時保養がてら滞在したが、冬を越えた翌年の4月は、そこから約50マイルほどアルノ川の流域を溯ったフローレンスに移って、そこを定住の地とした。

伝統とキリスト教的戒律の厳しい英国で、たとえ身邊の条件やむなきもの

があったにせよ、深窓の息女を拉致して私かに結婚逃亡したことは、シェリーの場合と同じに表面の社会秩序からは許しがたい事実であった。現にエリザベスの父は、その後彼女からの手紙は一切開封せずそのまま放置したそうである。幸に彼女の従兄 John Kenyon が毎年100ポンドをおくり、ロバートの母からも送金が続けられたので二人の生活には心配はなかった。ともあれ二人は真実の生活を求めて英国の歴史的因襲から脱却して自然の広野に出た。彼が青年期に陶醉したシェリーのあとを追ったとも考えられる。

Ah, did you once see Shelley plain,
And did he stop and spoke to you,
And did you speak to him again?
And strange it seems and new!

But you were living before that,
And also you are living after;
And the memory I started at—
My starting moves your laughter.

(Memorabilia I-II)

常套の世界に生きる者には、真実の生活は strange に見られ、それに驚異の眼を見張る者は側の者の嘲笑を買うであろう。彼の結婚は社会に対する身をもってする Renaissance であった。さればこそヨーロッパの歴史の中の Renaissance の発生地、フローレンスを憧れしめたものと想われる。彼の秀作 Andrea del Sarto と Fra Lippo Lippi とは、その舞台は明らかにフローレンスであり、主人公は二人とも、この「花の都」で過去の伝統から思い切って脱脚して独自の芸術に生き抜いた芸術家たちであった。こうして彼ら夫妻は十分に翼をひろげて愛と芸術とに生き抜いた。その間彼女の健康は奇跡的に増進して一子まで挙げるに至ったとは生命の奥妙さを思わせる。とはいえ、元来蒲柳の彼女に生きる幸福の許されたのはその後の15年間だけで、1861年、この地で55才で長逝した。その間彼女の女流詩人としての名声はますます高められると同時に、夫ブラウニングと与える詩的着想と靈感の点では他人の想像も及ばないほど偉大なものがあつた。

つぎにこの詩がなにゆえに詩人夫妻が元氣旺盛なのに老境を想像して、かように炉辺の安静を描く気持になつたかの疑問がのこる。これについては、筆者はキーツが Endymion の序に残した言葉を想い出すのである。

「幼年時の想像力は健康的だ、老成の円熟した想像力もまた健康的だ、だがその兩者の間には心が騒ぎ、性格も定まらず、生活も不安定で、近視眼的な野望も持つ、さればこそ以下に語るどころの人々は知れば知るほど見苦しさがあり、嘔吐を催さしめるのである」 (Keats; *Endymion* 序文)

第19世紀のローマン主義の詩人たちのうち、純朴卒直に幼年期を神聖視して、これこそ生命本来の姿であると謳ったのはワーズワスである。

The Child is father of the man
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.

人間の幼年期は、彼にとって救われた靈魂の姿であった。

Thou, whose exterior semblance doth belie
Thy soul's immensity ;
Thou best Philosopher, who yet dost keep
Thy heritage, thou Eye among the blind,
That, deaf and silent, read'st the eternal deep,
Haunted forever by the eternal mind,—
Mighty Prophet! Seer best!

幼年者は最善の哲学者、黙して語らず、しかも永遠の真理を読みとり、久遠の心に交わる至高の予言者であるという。

これに対して物の美と善とを誇張もせず、買取りもせず、在るがままに見ようとするキーツはワーズワスのように幼年期を理想化して謳歌はしない。その卒直さと無邪気とを尊むとともに人間老後の枯淡と達観とをも尊んでいる。そして幼年期と老境の間には、「人間的なあまりにも人間的な」憎悪、嫉妬、野望の時代の介在を認めている。キーツが若し生存を続けたならば、ブラウニングとわずかに17才の年長をもって第19世紀の詩壇に目覚しい活躍をしたはずで、同じイタリアで親交もあったであろう。

理想主義者のブラウニングは、その立場からの必然として老成の価値を強調する。これはローマン主義のワーズワスの回想的憧れとは正に反対である。これを端的にいったものは Rabbi Ben Ezra の巻頭言であろう。

Grow old along with me!
The best is yet to be,
The last of life, for which the first was made :

完成は未来にあって、そのために生成発展する。しかも彼の発展は肉の欲求

を否定して靈に生きようとの禁欲主義ではない。靈と肉とを二元的に考えてもいない。

As the bird wings and sings, Let us cry
"All good things Are ours, nor soul helps
flesh more, now than flesh helps soul!"

この他 Abt Vogler でも Cleon でも A Grammarian's Funeral でも、それら主人公たちはある程度の達見、達道の老人として描かれている。従って彼は自分の恋愛生活の完成を思うときに、炉辺に安住する老後の姿を想い浮べ、それをキーツの言う The mature imagination of a man とせざるをえなかったのであろう。

次に彼は何故にアルプスの荘厳雄大な断崖を背景としたかであるが、彼のロンドンからの逃避は、実は歴史的伝統から自然への復帰にはかならなかった。因襲を打破して本来の生活への革新甦生であった。彼の眼は都市の中央の荘厳なカテドラルではなく、何時の世に、誰の建てたとも知れぬ、もはや自然化された小やかな石造の会堂に宗教の敬虔と美を見ようとし、その傍の谷川、納のとびかう水溜、周囲の石の地衣、それに被いかぶさる齒染に鑑賞の眼をやっている。妻エリザベスの身体と心とに閃きでる美は、プラトーの言っているように、自然の美に共通なものとしての山々のたたずまいに、夕陽に、樹々などにも、輝きでているのであった。そこに彷徨する二人の心が投合すればこそ自然にも投合している。これが彼らの恋愛であり、結婚なるものの実体である。

Therefore I summon age To grant youth's heritage, Life's struggle
having so far reached its term : Thence shall I pass, approved A man,
for aye removed From the developed brute : a god though in the germ.
だから俺は青年期の置土産に加えるために老境を歓迎するのだ、生活の
苦闘はもう期限の終りまで達した；今後は俺は、何時までも、進化した
畜類から離れたれっきとした人間、発芽ながらの神として通用するはず
だ。
(Rabbi Ben Ezra 13曲)

これがブラウニングの老境観であり、この楽天的態度はすべての作品に共通であるといつてよからう。Abt Vogler や A Grammarian's Funeral はもちろん、厭世的の霧困気の漂う Cleon にもその片鱗が見られる。

古典に読みふける老学究と自分を想像する時の彼の興味は、もはや詩ではなく散文であるとは、枯淡な心は抒情詩や劇詩よりもむしろ、ギリシヤ文化

史の末期のネオプラトニズムの辺にあることを示すようである(L10)。

ギリシヤ文化はアレキサンドル大王の遠征によって八方に拡大して、その見通しは遠くなった(L16)。その外形は榛の枝の伸びのように脹んだが、中の構造は急激にすぼんでいる(L22)、とは325 B.C. アテネがマケドニアの武力の前に屈服して以後は、テミストクレス時代までの絢爛たる芸術も旺盛な学問的探求心もたちまちに萎縮したと言うのであろう。事実上パルセノフリーズの神殿はその後ついに再建されず、フィディアスにまさる名工がその破風を飾りえたとも聞かない。その尊いギリシヤ文化の流れは何処に流れついて、新しく花と咲き、果実をならせたか。「かくてわれらついにイタリアに、翠葉さまざまのその青春の国にいたる」(L24-25)とは、1453年コンスタンチノーブルの陥落とともに多くのギリシヤの学者や芸術家が亡命という細道によってイタリアに渡ったことと、その頃フローレンスの豪族メディキ家が惜しみなく財を賭し、便宜を与えて彼らを保護したため、この都が爾後全ヨーロッパに普及した文芸復興の発生地となったことを意味するであろう。同時にブラウニング自身としては、病弱なエリザベスを伴って、1862年、ここに移り住んだ宿運を意味すると思われる。

彼らは導かれるままにイタリアに來た(L26-7)。芸術美の宝庫イタリアは愛されるままに嫁がない女性の國だ。周辺の新興諸民族は、この國の芸術を愛し、憧れ、摂取しようとするが、イタリア芸術の独立性はいかんともしがたい(L28-30)。

この國では山間の荒廃した小聖堂でも古典的な趣きがあり、その中の壁画は名も知れぬ作家のものながら捨てがたい敬虔と美の想いを醸す。第8曲から第15曲までは、アルプスの南斜面の自然美を描写しているが、その筆致の微妙さはブラウニングの全詩集中の圧巻である。これに匹敵するのはワーズワスの“Tintern Abbey”中の叙景であろうが、個々の自然物に対する観察の精密さは、この方が勝っている。「溪谷との隙間に小径つらなり、玉石もて成る、その表面の地衣、蛾の斑紋をあざむき、小さき齒朶はその齒を磨がれし石肌^いに嵌めらる」(L46-50)「刺^{とげ}ある^い穂は、三つにて一つなる栗の実をゆくてに驟雨と降らしむ。森の木の実の臍^{ほぞ}落^{おち}は、霜月の初めより始りたれば一」(L52-55)「蔦の葉の紅は、盾のおもての血しぶきに似て、叢しく陰し、さなきは縁より葉軸まで黄金色にて、小仙女の掬いとり、妖精の針縫いしたる苔の敷物にひろげ見せしむ」(L56-60)とか「谷水は阻まれて、淀みて池となり蝸のむれ水面をとびかう」(L69-70)とか、まさに絵画的な描写である。

14曲—20曲 この間には山間の聖堂の更に詳しい説明と、聖日ごとにそこに集る山樵や炭焼きや捕鳥者のために行われるミサ聖祭、そのため山路をたどってくる司祭のことが歌われている。

21曲—25曲 当時は妻のエリザベスの方が夫ロバートよりも有名であった。知能も、感性も、表現力も優越していたことは、“わがレオナーよ”と神話上の最善の妻の名で呼びかけ、“わが心よ、おお眼よ！”と率直に礼讃しているのでも分る。彼は真心から妻を敬愛し、相携えて老境の行路を歩まうとする。22曲は難解というより、むしろ不可解で、“the crux of the poem”「詩の謎」と伝えられる。23曲は、眼前の妻の素晴しく大きな頭脳とそれを支える妖精のそれに似たかぼそい手などをうたいながらも、むしろ彼の入念な思慮考察に対して、打てば響くように即妙な頭脳の冴えを見せる彼女の応答振りに感銘している(L120)。思えば自分の結婚生活は、至上の幸福だ。これにくらべると、以前の青春は荒野にも等しいという(L125)。これは歳月がしからしめたことで、初め二人の靈魂は霧のように相交るかと思われたが、やがて一つになり、そのうえ互に吸収しつくして新しい谷川に変じ、どんな岩根をも超えて流れそめた(L130)。「すべてを新しくする」という偉大な天の声(ヨハネ黙示録21:5)をきき、新天地が到来するとき、その変化は二人にどう響くだろう。変りはないのだ(L135)。正直のところ、妻は知能でも感受性でも自分に先行しているので、神の経綸の新しい奥義でも自分に先んじて見せてくれる(L140)。だが二人が最初に出会ったときは、世人なみに生命の渇を癒そうとの見え透いた幸福のためであって、こんな祝福は想いもよらなかった(L145)。共々に現在を忘れて往時を回想し、諸事の根源に帰還し、それを愛しま^{いつく}うとする(L148)。

第31曲からは「何をか語りいたりしや」と話はずもとの山間の教会堂のあたりに戻る。鷹が空に円を描きそめると、森の小鳥が声をひそめる。空気が清いので、鷹の翼の彩紋が見える(L155)。午後になると、山中はあまりにも静寂になるので、胸の想いは募って語らざるをえなくなる(L159-60)。二人は腕をくみ、頬を接して歩きながら、語りあううち、万感胸にせまって言葉はとぎれた。黙々と石橋をわたり、荒廃の会堂をいとしみ、壁画の損傷を憂い、心の中でかような隠栖を願いつつ足許の苔に眼をやる(L166-170)。檐下のベンチに跪いて、格子窓から中を覗いたが、十字架は降され、祭壇の掛布さえないのは天罰を怖れぬ盗賊からの被害を避けたのだろう。小さな玄

関と扉があり、それに建築者の日付が読み取られた。もと来た橋をわたって、もとの山路を辿りそめた。はたと足はとまった、瞬時に永劫の一時だ！山の早瀬は涼々ときこえ、西空は和んでもう暗くなった、山中の黄昏はこんなに一挙にくるものか、一つ星、橄欖石の輝きだ。他人を混えぬ二人きりで、熟知しながら互いに一人一人である。見る景色、聞く音、光と暗影とが一つの魅惑となり、そこを去った（L171-190）。

39曲から47曲までは三転して、夫妻の結婚前の不安感の多かった恋愛期の心理描写となる。人の心は微妙だ！わずかの補足が大きく満足させ、些細な不足が世界を失わしめる！一声が幸福に心を足らわせ、一息が血の循環を阻む、これが生命の特質とは！（L191-195）彼女がその意なら二人の間には薄くとも侵し^{おが}がたい隔ての幕があったかもしれぬが、自分は付き人がありながら彼女の顔を見守り、その心持は世の友達の与えてくれるものと見た。その友とは私にとっては恋人たるものである（L196-200）。

恋愛は杜のようだ、翠濃き季節はそこに安んじて眠り、その枝をゆすぶるもよい。だが凋落の残葉は大切に、「最後の一片」は残すべきだ（L202-205）。ただ一人の恋人（最終の一片）を確保するためなら、杜の樹々全部をゆすぶるもよい、どうせ翌年はまた新緑に輝くはずだ。ただし、その一片だけは自然に散って来るまで待て。やがて微風に舞いおちて、汝の顔を見るとき、それが汝の胸を永遠の棲家たらしめる刹那である。（L210-215）高雅なおん身の姿よ、これを報償として得たのなら、一人の男子として墮地獄の苦勞をしたとて、なんの不満があろうか（L216-220）。おん身はことさらに無情を装って、われを疲れ衰えさせ、希望と絶望との孰れが、おん身本来の想いに叶うかを試し、私には当初の心に還らせようとしたのか（L221-225）。幸いにそうではなかった。さすがにおん身らしくただの一言で私の胸の空洞を充たしてくれ、一体となりえた。もはや二体でなく全くの一体である（L235）。

この合体は、実は自然の力によるもので、人が自然を把握し、自然がこの壮挙を完遂したにすぎぬ。われらは自由となり、自然は古来の姿に帰る（L236-240）。

第49曲以下には、成就した結婚生活の本質が述べられる。二人は楽園のアダムとイヴのように万有は彼らのために造られたものとなり、われわれが世界中に見るもの一切は、かくもある機会の業績に役立つのだ。そのとき靈魂は自らの成果、すなわち実によって自己を宣揚する（L241-245）。憎悪でも愛でも成果あらしめよ。それは人類の総合的な仕事を促進し、多数中の各々

にそれぞれの生活をさせながら、総合企画による民族生活をも進捗させる(L 246-250)。自分はあの際の恋の勝利で名をあげ地位もえた。区々たる生涯は完成したが、自然が私を最善の者—妻よ、おん身を愛すべく生れた者—として迎え入れたからだ(L 251-255)。おん身は今炉辺に黙然としている、その額、その細い手はいまさら語る要はない。全地は今一人の男を確保し、その地の利は天の利でもある。全容は秋が来れば考えるに値しよう。それはかねていったとおりにいつか私の為そうとするものだ(L 256-265)。

以下この詩の対訳を掲載する。微力と浅学のため訳語や曲解が相当多かろうと思うが、自分としては老馬に鞭つて全力は尽したつもりである。参考書として最も多く恩恵をうけたのは石田憲次先生の *Men and Women* の立派な註釈書(研究社発行)であり、外国書では二、三の英文学史のほか

De Van: *Browning Handbook*

Edward Berdoe: *The Browning Cyclopædia*

James Fotheringham: *Studies of the Mind and Art of*

Robert Browning

である。特記すべきは最初の訳稿を明治学院大学の文学部長平林武雄君が懇切丁寧に行方を比較検討して極めて有益妥当な意見を与えられたことである。訂正しえた個所の多かったことを茲に深く感謝します。前回 *Andrea del Sarto* の場合は石田憲次先生からそれにもまさる極めて厳正な御斧正と懇切な理解上の御教示を賜ったことをこの誌上で厚く感謝します。不幸にも、私は9月5日から鼻腔に多量の出血がつづき、その後1カ月の今日尚入院加療中のため、この記事の校正が十分にできませんでした。従ってその仕事について当大学教授 Dorothy Tayler 女史に並々ならぬ労苦を担って貰いました。病床によせられた多くの同僚や学生がたの御好意に併せてこのことも有難く感銘しています。(1966. 10. 5 札幌医大病室にて)

By The Fire-Side

1

How well I know what I mean to do
When the long dark Autumn evenings come,
And where, my soul, is thy pleasant hue?
With the music of all thy voices, dumb
In life's November too! 5

2

I shall be found by the fire, suppose,
O'er a great wise book as beseemeth age,
While the shutters flap as the cross-wind blows,
And I turn the page, and I turn the page,
Not verse now, only prose! 10

3

Till the young ones whisper, finger on lip,
"There he is at it, deep in Greek—
Now or never, then, out we slip
To cut from the hazels by the creek
A mainmast for our ship." 15

4

I shall be at it indeed, my friends!
Greek puts already on either side
Such a branch-work forth, as soon extends
To a vista opening far and wide,
And I pass out where it ends. 20

3 **hue** n.=shouting とも解されるが次行の voices に対比する color と解した。

7 **wise book** n.=ギリシアの哲人や悲劇作家の著作の意

8 **cross-wind** n.=横なぐりに吹く風, 狂風

炉辺にありて

1

秋の夜長の来らむ時
為すべき業をわれは知る
わが魂よ、汝の心地よき色彩はいずこそ？
生命の霜月には汝が声をつくせる歌も
声なきものを！

2

想い見る、われは炉辺にありて
老境にふさわしき厚き哲人の書に向い
吹く狂風に鎧戸のはたたくひま
われは一葉また一葉とめぐりゆかむも
今は詩にはあらず、ただ散文のみ！

3

やがて若き者ども、唇に指して囁く
「彼まさにギリシャの書にひたすらなり——
今こそ絶好の機、忍び出でて
入江のわきの榛の杜に
われらが舟の大橋を切りにゆかまし」

4

わが友らよ、われはギリシャ古典に向い居るべし！
ギリシャ文化は既に路の両側に
枝葉を伸ばして、たちまちに遠くも広き
眺望をつくりなし、われは
その終る辺を渉猟しおえたり。

14 creek n.=inlet of sea-coast 入江

17 Greek n.=ギリシアの古代文化 Greek culture

19 vista n.=見透しの景色 mental prospects = 精神的視界の意でもある

5

The outside-frame like your hazel-trees—
 But the inside-archway narrows fast,
 And a rarer sort succeeds to these,
 And we slope to Italy at last
 And youth, by green degrees. 25

6

I follow wherever I am led,
 Knowing so well the leader's hand—
 Oh, woman-country, wooed, not wed,
 Loved all the more by earth's male-lands,
 Laid to their hearts instead! 30

7

Look at the ruined chapel again
 Half way up in the Alpine gorge.
 Is that a tower, I point you plain,
 Or is it a mill or an iron forge
 Breaks solitude in vain? 35

8

A turn, and we stand in the heart of things ;
 The woods are round us, heaped and dim ;
 From slab to slab how it slips and springs,
 The thread of water single and slim,
 Thro' the ravage some torrent brings! 40

9

Does it feed the little lake below ?
 That speck of white just on its marge
 Is Pella ; see, in the evening glow
 How sharp the silver spear-heads charge
 When Alp meets Heaven in snow. 45

22 **inside-archway** n.=内側のアーチ形の構造—ギリシアの思想的内容の意

25 **youth** n.=前行の Italy をうけた青春の国の意

34 **iron forge** n.=鉄の鍛工所。(水車を利用した庄延工場)

5

その外廓は故国の襟に似るも—
 内側の構造は急に疎まれて
 これらに追従するものまれなり
 かくてわれらついにイタリヤに
 翠葉さまさまのその青春の国にいたる。

6

われは従う、いづこに導かるとも
 案内者の手を知りつくせばなり—
 ああ、女性の国よ、愛を求められて、嫁がず、
 地上の男性の国々にいやまし愛せらるるも
 ただ彼らの心へのみやどる！

7

改めて荒廢の聖堂に眼をとめよ
 アルプスの峡谷の中腹に高し
 わが指^{ゆび}さすは塔なりや
 はた製粉所なりや鍛鉄所なりや
 寂莫を破るに効なし！

8

眼を転ずればわれら万象の中心に立てり；
 木々は囲みたち、鬱^{ふさが}りて暗し；
 岩盤より岩盤へとそそぎさざらぐは
 一筋のはそき水の白糸
 洪水の跡をつたい来れるか！

9

この流れ、麓の小湖にそそぎ入るや
 湖畔の白き斑点はペラの村なり；
 見よ、夕映えのうちに
 銀白の槍の穂先のいかに鋭く身構えたるかを、
 アルプスの峻嶺白雪のまま天に接する際に。

38 slab n.=thin flat stone 岩盤

40 ravage n.=destruction 崩れた跡

44 charge v.=to place in position for onset (C. O. D.) 構える

10

On our other side is the straight-up rock ;
 And a path is kept 'twixt the gorge and it
 By boulder-stones lichens mock
 The marks on a moth, and small ferns fit
 Their teeth to the polished block. 50

11

Oh, the sense of the yellow mountain flowers,
 And the thorny balls, each three in one,
 The chestnuts throw on our path in showers,
 For the drop of the woodland fruit's begun
 These early November hours— 55

12

That crimson the creeper's leaf across
 Like a splash of blood, intense, abrupt,
 O'er a shield, else gold from rim to boss,
 And lay it for show on the fairy-cupped
 Elf-needed mat of moss, 60

13

By the rose-flesh mushrooms, undivulged
 Last evening—nay, in to-day's first dew
 Yon sudden coral nipple bulged
 Where a freaked, fawn-coloured, flaky crew
 Of toad-stools peep indulged. 65

14

And yonder, at foot of the fronting ridge
 That takes the turn to a range beyond,
 Is the chapel reached by the one-arched bridge
 Where the water is stopped in a stagnant pond
 Danced over by the midge. 70

48 **boulder-stones** n.=water-worn rounded stones 玉石

52 **thorny balls** n.=栗の毬 (いが)

58 **else** adv.=otherwise さなくんば

10

他の側は垂直の岸壁なり；
 それと溪谷との隙間に小径つらなり
 玉石もて成る，その表面の地衣
 蛾の斑紋をあざむき，小さき齒菜はその齒を
 磨かれし石肌に嵌めらる。

11

ああ黄色の高山の花の趣きよ
 刺ある毬は，三つにて一つなる
 栗の実をゆくてに驟雨と降らしむ。
 森の木の実の臍落は，霜月の
 初めより始まりたれば——

12

かなたなる鳶の葉の紅は，盾のおもての
 血しぶきに似て，厳しく，陰し
 さなきは縁より葉軸まで黄金色にて
 小仙女の掬いとり，妖精の針縫いしたる
 苔の敷物にひろげ見せしむ

13

昨夜は絶えて見えざりし
 淡紅の肉の茸のかたわら，今朝の初露に
 俄かにおしゃぶりに脹みいでぬ
 そのあたり斑なる小鹿色の皮もろき
 笠茸の群落，所得顔にのぞけり。

14

その彼方突きいでし崖の裾
 別の嶺にと廻りゆくところに
 アーチ形の橋こえて着く会堂あり，
 谷水は阻まれて，淀みて池となり
 蝸のむれ，水面をとびかう。

59 **fairy-cupped** adj.= 精が水から掬いとった

60 **Elf-needled** adj.= 妖精が縫った

64 **fawn-coloured** adj.= 小鹿の毛の色をした，鹿毛色

15

The chapel and bridge are of stone alike,
 Blackish grey and mostly wet ;
 Cut hemp-stalks steep in the narrow dyke.
 See here again, how the lichens fret
 And the roots of the ivy strike ! 75

16

Poor little place, where its one priest comes
 On a festa-day, if he comes at all,
 To the dozen folk from their scattered homes,
 Gathered within that precinct small
 By the dozen ways one roams 80

17

To drop from the charcoal-burners' huts,
 Or climb from the hemp-dressers' low shed,
 Leave the grange where the woodman stores his nuts,
 Or the wattled cote where the fowlers spread
 Their gear on the rock's bare juts. 85

18

It has some pretension too, this front,
 With its bit of fresco half-moon-wise
 Set over the porch, art's early wont—
 'Tis John in the Desert, I surmise,
 But has borne the weather's brunt— 90

19

Not from the fault of the builder, though,
 For a pent-house properly projects
 Where three carved beams make a certain show,
 Dating—good thought of our architect's—
 'Five, six, nine, he lets you know. 95

75 **strike** v.=penetrate 此の場合は根を刺入れるの意

77 **festa-day** n.=holiday or saint's day カトリック教会の聖日又は聖人祭

81 **drop** v.=to come into place (C. O. D.) 此の場合は次の行の climb に対応して
 降り来るの意

15

会堂と橋とは石にて造られ
黒ずみし灰色にして霧に潤い^{うるお}
刈られし亜麻の茎、狭き溝に浸さる。
見よ、ここにも地衣模様をえがき
蔦の這根の根付けるを！

16

佗しくも小やかなる所に、専属の一人の司祭
聖祭の日毎に、来りうる限りは
散らばる家々より、さすらいの山路たどりて
この狭き聖地に集いよる少数の人のため
通いくるならいあり

17

或るは炭焼の小屋よりおりきたり
或るは亜麻晒しの低き差掛屋より登り来る^{げや}
山樵は木の実を蓄えし納屋をあとにし、
捕鳥者は岩山のあらわなる突端、捕鳥具を
ひろげし場所の網代小屋をあとに来る。

18

会堂は見耐えなきにあらず、その正面は
半月形の壁画を、芸術初期の習い^{なら}により
玄関の上方に置く——
荒野の聖ヨハネとわれは想ひしも
風雨の害を現わせり。

19

されども、そは建築家の手落ちならず
程よく突出でし庇となりしところ
三本の曲れる梁は或る見栄えをしめし
5, 6, 9の日付けまたこの建築家の——
良き思いつきと悟らしむ。

85 gear n.=apparatus—仕掛け（この行では捕鳥器）

87 fresco n.=壁画—天井や壁の漆食が乾かぬうちに水彩で描いた絵画

90 brunt n.=鋒先, bear the brunt of=矢面に立つ

95 Five, six, nine, 1569年の意

20

And all day long a bird sings there,
 And a stray sheep drinks at the pond at times :
 The place is silent and aware ;
 It has had its scenes, its joys and crimes,
 But that is its own affair. 100

21

My perfect wife, my Leonor,
 Oh, heart my own, oh, eyes, mine too,
 Whom else could I dare look backward for,
 With whom beside should I dare pursue
 The path grey heads abhor ? 105

22

For it leads to a crag's sheer edge with them ;
 Youth, flowery all the way, there stops—
 Not they ; age threatens and they contemn,
 Till they reach the gulf wherein youth drops,
 One inch from our life's safe hem ! 110

23

With me, youth led—I will speak now,
 No longer watch you as you sit
 Reading by fire-light, that great brow
 And the spirit—small hand propping it
 Mutely—my heart knows how— 115

24

When, if I think but deep enough,
 You are wont to answer, prompt as rhyme ;
 And you, too, find without a rebuff
 The response your soul seeks many a time
 Piercing its fine flesh—stuff— 120

92 **pent-house** n.=sloping roof 庇

98 **aware** adj.=conscious—自得のさま, 落ちつけるさまの意

101 **Leonor** Beethoven の opera “Fidelio” の女主人公で理想的な妻の名

20

そこに鳥ひねもすうたい、
 迷羊時に池水を飲む：
 この域静寂にして自得の趣きあり；
 独自の風致あり，愉悦あり，また答あり，
 されどそは，それ自体のこののみ。

21

わが十全の妻よ，わがレオナーよ，
 ああ，わが心よ，おお眼^{まなこ}よ，わがものたる眼よ，
 汝を措きてわれ誰を敢て振返り見るべき
 汝のほか誰とわれ敢て行くべき
 老人の厭う行路を？

22

そのゆくて彼らには絶壁なればなり；
 花咲き匂う道，青春は，そこに停止す—
 老人は停止せず；年令は威嚇し彼らは蔑み
 やがて青春者の，生活の死生の縁を僅かに外して
 陥るべき深淵に到る。

23

われとともに青春は過されぬ—今ぞ語らん，
 炉辺に座して書を読む汝のすがた
 いみじきその額，それを
 黙々と支える妖精の手，これらには
 もはや眼をとめざるべし—わが心に刻めるままなれば—

24

われひたすらに深く想いをこらせる時も
 汝の之に応答するの速やかなる音節を合すに似る；
 また，その応答を即妙に
 気付くは，汝の魂絶えず
 その繊細なる肉体を通じて探ね居るためか—

114 **spirit-small hand** 妖精の手にも似た小さき手

117 **prompt as rhyme** 「打てば響く如く」応答の即妙な意。

120 **fine flesh-stuff**=delicately fashioned flesh-stuff 肌理の細い透き通るような肉
 体 (Hilliard's comment on Mrs. Browning)

25

My own, confirm me! If I tread
 This path back, is it not in pride
 To think how little I dreamed it led
 To an age so blest that by its side
 Youth seems the waste instead! 25

26

My own, see where the years conduct!
 At first, 'twas something our two souls
 Should mix as mists do: each is sucked
 Into each now; on, the new stream rolls,
 Whatever rocks obstruct. 130

27

Think, when our one soul understands
 The great Word which makes all things new—
 When earth breaks up and Heaven expands—
 How will the change strike me and you
 In the House not made with hands? 135

28

Oh, I must feel your brain prompt mine,
 Your heart anticipate my heart,
 You must be just before, in fine,
 See and make me see, for your part,
 New depths of the Divine! 140

29

But who could have expected this,
 When we two drew together first
 Just for the obvious human bliss,
 To satisfy life's daily thirst
 With a thing men seldom miss? 145

121 **confirm** v.=sanction 承認する

130 **obstruct** v.=block up 阻む

132 **The great Word**—「見よわたしはすべてのものを新たに作る」黙示録21:5の言葉を指す。

25

わが者よ、われを信ぜよ！たとえわれ
この路を踏み返るとも、想いみて誇るべきにあらずや
かくも恵まれし老境に導かるとは
夢想だにせずして、この境涯にくらぶれば
青春は荒野と想わると！

26

わが妻よ、歳月の司るところを見よ！
初めは吾ら二人の魂と魂
霧と霧との交わるに似たるものなりしを
今は互の中に吸われはては；新しき流れに
流れゆく、いかなる岩根阻むとも。

27

想い見よ、われら一つの魂
万物を一新したまう^{いじみ}俤き「言葉」を会得せん時—
地は壊れ果てて、天の拡がる時—
その異変、われとおん身にいかに響かん
手にて造られざる家に住むわれらに？

28

ああ、思わざるをえざるはおん身の頭脳
わが頭脳を促し、おん身の心、わが心に先んじ
おん身は、畢竟、わが寸前にあるべく
その役割として神の新しき奥義を
^{みかす}自ら眺め、われにも眺めしむ！

29

されど何人か之を期待しえたりしや？
われら二人の睦みあいし初めは
^{まぎ}紛れもなく人間の幸福のためにすぎず
生命の日毎の渴きを癒すに
人々の得るに易きものによりしのみ。

135 **the House** 「神からいただく建物…人の手によらない永遠の家」コリント人への第
2の手紙5：1の意

138 **in fine** = after all 畢竟、つまりは、の意

140 **depths** n. = 深淵、この場合は奥義

30

Come back with me to the first of all,
 Let us lean and love it over again—
 Let us now forget and then recall,
 Break the rosary in a pearly rain,
 And gather what we let fall! 150

31

What did I say?—that a small bird sings
 All day long, save when a brown pair
 Of hawks from the wood float with wide wings
 Strained to a bell: 'gainst the noon-day glare
 You count the streaks and rings. 155

32

But at afternoon or almost eve
 'Tis better; then the silence grows
 To that degree you half believe
 It must get rid of what it knows,
 Its bosom does so heave. 160

33

Hither we walked, then, side by side,
 Arm in arm and cheek to cheek,
 And still I questioned or replied,
 While my heart, convulsed to really speak,
 Lay choking in its pride. 165

34

Silent the crumbling bridge we cross,
 And pity and praise the chapel sweet,
 And care about the fresco's loss,
 And wish for our souls a like retreat,
 And wonder at the moss. 170

149 **rosary**—カトリック教会の念珠、普通は Ave Maria を称えつつ繰る55珠のもの

154 **strained to a bell**—翼がひろがって吊鐘状をするの意

160 **heave** v.=to raise and fall with alternate motions as the lungs in heavy breathing. 胸が高鳴る

30

そもその初めにわれとともに帰りゆきて
互によりそいて今更にそれをいとしまん—
今を忘れて、その時を想いおこさん
数珠は切断して真珠の雨と降らせ
散ぜしものを拾いあつめん。

31

何をかわれ語り居りし？ そは小鳥のひねもす
囀りたること、声をひそめしは、鶯色の
ひとつがい 一番の鷹、森より出でて、鐘状に翼を拡げて
かけめぐ 翔巡りし時のみ、真昼の空の輝きに
翼の縞と輪はあざやかなり。

32

されど昼すぎて、黄昏の近づけば
さらに好まし；静寂のますます
ふかまるは、君の想い半にすぎずして
その胸内のふくらみのゆえに
身の覚えを洩さざるをえしむ。

33

かくてわれら二人、相並びてさすらう
腕をくみ、頬をちかづけ
おやみなく問いつ、答えつ
かかる時わが心、真実に語らんとしてあせり
誇りの想いに胸も塞がる。

34

沈黙のまま、崩れゆく橋をわたり
ゆかしき会堂を哀れみつつ、称えつつ
壁画の害いに胸をいたましむ
われらの靈魂のため、かかる隠栖の地を希いつつ
あたりの苔を愛ず。

164 convulse v.=to agitate greatly 頻りにあせる

168 loss n.=damage 損傷の意

169 retreat n.=The place to which any one retires 隠栖

Stoop and kneel on the settle under—
 Look through the window's grated square :
 Nothing to see! for fear of plunder,
 The cross is down and the atlar bare,
 As if thieves don't fear thunder. 175

36

We stoop and look in through the grate,
 See the little porch and rustic door,
 Read duly the dead builder's date,
 Then cross the bridge we crossed before,
 Take the path again—but wait! 180

37

Oh moment, one and infinite!
 The water slips o'er stock and stone ;
 The west is tender, hardly bright.
 How grey at once is the evening grown—
 One star, the chrysolite! 185

38

We two stood there with never a third,
 But each by each, as each knew well.
 The sights we saw and the sounds we heard,
 The lights and the shades made up a spell
 Till the trouble grew and stirred. 190

39

Oh, the little more, and how much it is!
 And the little less, and what worlds away!
 How a sound shall quicken content to bliss,
 Or a breath suspend the blood's best play,
 And life be a proof of this! 195

171 **the settle** n.=a bench with a high back 長椅子

175 **thunder** n.=此の場合は神の怒りとしての雷鳴, to utter violent denunciation.

182 **stock** n.=a block of wood 切株

35

のきした
 檐下の長椅子にこごみ跪き—
 窓の格子よりすかし見たるも
 何ものも見えず！ 盗みを怖れしたためか
 十字架も降され、祭壇の上もむなし
 物取りは雷鳴（天罰）を怖れざる如くに。

36

身をかがめ、格子よりのぞきて、見えたるは
 ささやかなる玄関と鄙^{ひな}ぶりの扉
 今は亡き^{たくみ}大工の日付は明らかに読まる
 もと来し橋を渡りて
 またも山路をたどる—しばし待て！

37

おおこの一時よ、一瞬にして無限なり！
 水は切株と岩とを超えて流る；
 西空は和^{なご}みてほの暗し。
 せまる黄昏は何たる速き夕暗ぞ—
 星一つ、橄欖石の輝き！

38

立てるはわれら二人、他の一人を交えず
 されど相互には一人、相互に知り尽したれば。
 見たる景色、聞いたる音
 もろもろの光、もろもろの陰影、魔力となり
 不安の生じたれば、身を転じぬ。

39

ああ僅少の余裕、なんたる豊かさぞ！
 僅少の不足、もろもろの世界を失わしむ！
 一つの音いかに心をたらわせて幸福ならしめ
 一つの呼吸いかに血液のよき活動を防げしか
 生命はこの事実の証拠ぞ！

185 chrysolite n.=χρυσόλιθος=topaz 黄玉の意、貴橄欖石ともいう

189 The lights and the shades 山間の夕暮が速かに来て、光と暗との対照の烈しさが次行のように心を動かせる

191 the little more 僅かの好意の表現が相手に大きな欣びを与える、之に反し the little less 僅かの好意の不足が心を暗黒にする

40

Had she willed it, still had stood the screen
 So slight, so sure, 'twixt my love and her.
 I could fix her face with a guard between,
 And find her soul as when friends confer,
 Friends—lovers that might have been. 200

41

For my heart had a touch of the woodland time,
 Wanting to sleep now over its best.
 Shake the whole tree in the summer-prime,
 But bring to the last leaf no such test.
 “Hold the last fast!” says the rhyme. 205

42

For a chance to make your little much,
 To gain a lover and loss a friend,
 Venture the tree and a myriad such,
 When nothing you mar but the year can mend!
 But a last leaf—fear to touch. 210

43

Yet should it unfasten itself and fall
 Eddying down till it find your face
 At some slight wind—(best chance of all!)
 Be your heart henceforth its dwelling-place
 You trembled to forestal! 215

44

Worth how well, those dark grey eyes,
 —That hair so dark and dear, how worth
 That a man should strive and agonise,
 And taste a very hell on earth
 For the hope of such a prize! 220

198 **fix her face** の fix は to direct her gaze or attention の意。じっと眼を見交
 わす

201 **touch** n.=mental sensitiveness—趣きとか気心の意

206 **to make your little much** は次の一行と同格に考える

40

彼女の志なりせば、わが恋と彼女との間には
幽かなれど確かなる隔ての幕のありもしたらん。
われ、付き人を中にして、彼女の顔を見まもりたり
その心をも、朋友の示すものながらに
朋友とは一相愛の者たるべき者として。

41

そは、わが心に森の季節の趣きありて
今その最善の態に安らぎ眠らんとす。
盛夏には樹の全体をゆすぶれ
されど凋落の残葉にはその試みはやめよ
歌はいう、「最後の葉は残せ」と。

42

汝の乏しきを豊かならしめ
友を失うも恋人をうる好機のためには
その年に償いて何もかも失わずとすれば
その樹その他の無数の樹々をゆすぶれ
されど最後の一葉は一心して触れざれ。

43

しかもそれみづか自ら枝を離れて
そよ風に舞いおち、ついに
汝の顔を見るにいたらば（絶好の機なるべく）
その後は、汝が胸をその棲家たらしめよ
そは汝が叶えざるにやとおのきしものぞ！

44

われに尊きは、汝の薄炭色の眼
薄炭色のなつかしき髪、男として
かかる良き報償をえんため、努め苦しみ
地上の地獄を味了したりとて
いかに効あることなりしぞ！

209 mar v.=ruin

212 Eddyng ad.=moving in an eddy. 渦巻き動く、舞いおちる

215 forestal=forestall v. to stop from happening—叶えられなくなる

45

Oh, you might have turned and tried a man,
 Set him a space to weary and wear,
 And prove which suited more your plan,
 His best of hope or his worst despair,
 Yet end as he began. 225

46

But you spared me this, like the heart you are,
 And filled my empty heart at a word.
 If you join two lives, there is oft a scar,
 They are one and one, with a shadowy third;
 One near one is too far. 230

47

A moment after, and hands unseen
 Were hanging the night around us fast.
 But we knew that a bar was broken between
 Life and life ; we were mixed at last
 In spite of the mortal screen. 235

48

The forests had done it ; there they stood—
 We caught for a second the powers at play :
 They had mingled us so, for once and for good,
 Their work was done—we might go or stay,
 They relapsed to their ancient mood. 240

49

How the world is made for each of us !
 How all we perceive and know in it
 Tends to some moment's product thus,
 When a soul declares itself—to wit,
 By its fruit—the thing it does ! 245

231 **hands** n.=manners of handling 手の動き

235 **mortal screen** n.=此の世限りの肉体の隔て

237 **powers** n.=自然の権能, 自然の靈能

45

おお汝は身をそらして男を試みしか
 疲れ衰うる余地を彼にあてがいて
 最善の希望と最悪の絶望とのいずれが
 汝の思惑に叶うかを試し
 さらに彼の当初の如く終らしめんとせしや。

46

されど汝、われにこれをなさしめず、汝の心の如く
 一言もてわが空洞なる胸をみたしぬ。
 汝もし二つの生命を合せたらんには疵あるは恒にて
 二人は一と一、おぼろげに第三者を伴いて
 一つに近き一つとは余りにも遠し。

47

暫くして、見えざる手
 暗の幕を垂れて二人を深く囲みぬ。
 されど生命と生命との障壁は
 崩されしを知る；われら遂に
 人の身の隔てをよそに一体となりぬ。

48

森こそ之を果せり、見よ森は立てり—
 われら一瞬に自由なる自然力を捉えぬ；
 自然力はかく一挙に而も幸福にもわれらを一体となし
 その業はとげらる—われらゆくとも留るとも
 森は千古の容態に戻りぬ。

49

げに世界はわれら各々のために成る！
 その中にわれらが認めかつ知る一切は
 かくも或る瞬間の成果にいたらしむ
 そは靈魂がそれ自身を発揚したる時にて—云わば
 その成果により—その為す事実を発揚したるなり！

240 relapse v.=restore to a former place もとに戻す

245 the thing it does! its fruit に apposition として読む

248 recruit=strengthen 補強するの意

50

Be Hate that fruit or Love that fruit,
 It forwards the General Deed of Man,
 And each of the Many helps to recruit
 The life of the race by a general plan,
 Each living his own, to boot. 250

51

I am named and known by that moment's feat,
 There took my station and degree.
 So grew my own small life complete
 As nature obtained her best of me—
 One born to love you, sweet! 255

52

And to watch you sink by the fire-side now
 Back again, as you mutely sit
 Musing by fire-light, that great brow
 And the spirit-small hand propping it
 Yonder, my heart knows how! 260

53

So the earth has gained by one man more,
 And the gain of earth must be Heaven's gain too,
 And the whole is well worth thinking o'er
 When the autumn comes : which I mean to do
 One day, as I said before. 265

250 to boot=in addition …と共に, または…するのみならず

251 feat n.=achievement 偉業または功業

254 her best of me …われを自然の最善のものとしたの意

50

その成果、憎悪たりとも、はた、愛心たりとも
 そは人間の一般の行動を促進し
 衆人の各自は全般の企画により
 個人はおのがじし生きつつ之とともに
 民族の生活を拡充せしむ。

51

われはその機会の功業によりて名声を博し
 地位と栄誉とをえたり
 かくてわが小かなる生涯の完成に達したるは
 自然がわれを最善の者、いとしき汝を愛するために
 生れつきたる者として認めたればなり。

52

汝、今炉辺にてありし日に戻る
 いろり火のわきに物想いつつ
 黙々と座せる汝のさま、いみじき額と
 それを支えたる妖精の小さき手よ
 わが心に刻まれしままなり。

53

かくて地は一人の男によりて利するところあり
 その地の利はまた天の利たるべし
 秋來りなば、その全容は想いかえずに
 値いすべし、そはわれかねて語りしごとく
 いずれの日にか為さんと思ふことぞ。

256 **to watch you** は前行の *to love you* と同格に解して、ともに *one born* にかかる
 265 **as I said before** は此の詩第1行の *what I mean to do* を想起して264行の
which I mean to do を符合させて考える